

学校だより 希望の鐘

ひとつのつぼみはいつしか花になる



八戸市立 小中野中学校

平成28年6月10日(金)

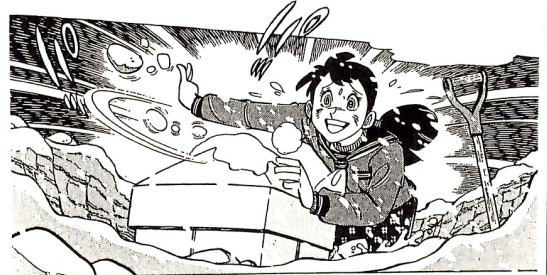
No.46

文責：校長
工藤聡

「小中野中学校の魂」と「小中野中生の誇り」

私は、ものすごい「マンガ好き」です。小さい頃から58歳になった今まで、いろいろなマンガを読んできました。そして、今でも読んでいます。この学校だよりでも、そういったマンガを紹介しながら、いろいろな話をするともあると思います。

私の好きなマンガ家の一人に、矢口高雄という秋田県出身の人がいます。代表作は「釣りキチ三平」という、何よりも釣りが好きな少年が、いろいろな所で 様々な人と出会い、釣りをしながら成長していくというものです。そんな矢口高雄さんの作品に、道徳の教材としても紹介されたことのある「校門を掘る少女」があります。そのあらすじは、「時代は、戦後まもない頃。田んぼの中に新築となった校舎があるが、あるのは建物だけで、周りにフェンスなどなく、生徒はどこからでも校舎に入ってくるのができた。あるとき、生徒会の会議で、生徒の一人がそういったことはやめて、きちんと校門から入るべきだと言うと、会議に参加していた全員が賛成する。ところが、学校には校門なるものが予算の関係で作られておらず、校長先生が自費で大工さんをお願いし、木で空洞の、まるで天ぶらの衣のような校門を作ってもらった。また、色も本物らしく見せるために、コンクリート色で塗装してもらった。それ以来、生徒は必ず校門を通り通学するようになる。しかし、場所は全国有数の豪雪地帯のため、冬になるとその校門が雪で埋もれ、どこにあるかもわからなくなってしまう。ある雪の朝、校長先生が窓の外を見ると、一人の女子生徒がスコップで校門を掘り返そうとしていた。担任の先生に聞くと、特に誰からか頼まれたわけではないようである。その日から、その中学校では雪が降ると、生徒が誰ともいわず自発的にスコップを持ち出し、校門を掘り出すのが伝統となった。」というものです。



みなさんは、この話（担任の先生に、マンガを縮小したものを渡してありますので、興味のある人は見てください）をどのように思いますか。マンガの少女が雪から掘り起こしたのは、単なる校門ではなく、同級生達への思いやりであり、校長先生をはじめとする先生方への感謝の気持ちであり、自分自身の誇りであったに違いないと思います。その少女を見て、他の生徒達も普通に校門を掘るようになるのですが、やはり当たり前のように自分達の学校を大切に思う気持ちがあったのだと思います。そんな生徒達を育てたのは、戦後の物のない時代ですが、豊かな気持ちを持った家族の方々や先生だったと思いますし、何よりも生徒一人ひとりが責任感と自主性を持っていたのではないのでしょうか。

私は、市中体の大会は、各中学校の「魂」とその学校の生徒の「誇り（プライド）」がぶつかり合う場だと思っています。7日には1年生の初めての応援がありましたが、その最初に、応援団長の藤島未羽さんが「小中野中生としてのプライドを持って応援しましょう」と言っていました。すごく重い言葉だと思います。「誇り」と同じような意味なのですが、私は「矜持（きょうじ）」という言葉が大好きです。「自ら頼みとするものがあって誇りとすること」という意味です。これまで先輩方が築きあげてきた伝統、中学校入学以来取り組んできた練習、心から応援してくれる家族や先生、そして同級生や先輩・後輩と、みなさんには頼みとするものがいっぱいあります。それを「魂」に変えて、残りの一週間に挑んでももらいたいと思います。

以前、助川先生に、小中野中学校野球部の帽子を渡されました。黒い帽子に、金色で縁取られた黒の「K」が刺しゅうされている物です。私は、小中野中学校の「魂」を手渡されたと思っています。

市中体夏季大会まで、あと……8日。